
エンドレス 異聞 (エンドレスエイト 8193回目)

U B O B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレス 異聞 (エンドレスエイト 8193回目)

【Nコード】

N2280J

【作者名】

UBOB

【あらすじ】

ハルヒとともに迎えた高校一年の夏休み、長門により俺たちは8193回目の夏休みを過ごしていると知らされた……

起（前書き）

黒の貴公子さんの

【涼宮ハルヒ二次SS】 エンドレスエイト 13104回目

）

<http://ncode.syosetu.com/n8826h/>

を創作の参考にさせていただきました。是非合わせて読んでいただければと思います

起

夏休みには夏らしく夏じみた事をすると言言したハルヒに連れ出された夏祭りの夜、ハルヒに引つ張り回されたあげくに花火なんぞをして危うく火傷をしかけながらも何とか無事に帰り着いた我が家でさすがに疲れたとぐったりと横になり眠りについていた深夜の事だ。俺の貴重な睡眠は枕元で突如鳴り始めた一本の電話で中断される事となった。こんな時刻に電話をかけてくるのは非常識極まりないハルヒに違いないと今夜ばかりは思いつきり文句を言うべきと思いつつ寝ぼけ眼で着信ボタンを押した俺は思いもかけない声を耳にすることになった。

聞こえてきたのは間違えようも無い朝比奈さんの声、しかもぐしょぐしょに泣き濡れた声だった。

嗚咽の合間に聞こえてくる言葉がどうやら俺を呼んでいるらしいと理解した瞬間、入れ替わって携帯から飄々とした古泉の声が俺の耳に届いた。

古泉、俺の麗しの朝比奈さんとこんな時刻に一緒に何をしている、しかも朝比奈さんが泣いているとは……

お前はいったい何をした、俺がたちまちに成敗してくれると古泉の言っていることを半分も聞かずに慌てて服を着替えると玄関を飛び出し自転車を駅前の公園へと急がせた。

息せき切ってたどり着いた公園は辺りのビルの照明も消え、照らすはぼんやりとした水銀灯の明かりだけ。その薄暗いに中に朝比奈

さん、古泉、そして長門の姿が見える。

「キヨン君、私、未来に帰れなくなっちゃいましたあ」

慌てて朝比奈さんの前へ走り寄った俺に涙ながらに朝比奈さんは思いも寄らない事を語り始めた。随分と『禁則事項』の多い朝比奈さん語った話を俺なり解釈するとどうやら朝比奈さんは未来と連絡が取れない状態に為ってしまったという事らしい。

いったい何故なんだ？

「僕としても理解をしかねている、というか、正直申し上げて全く信じがたい事です。」

少なくとも八月の十五・六日辺りまで、朝比奈さんは未来と連絡出来ていた。なのに現在は連絡が取れない、そうですね？

まさかとは思いますが、未来の方でもお盆休みをしているとか、そんな事は無いでしょうか？」

「そんな、禁則事項がお休みするって、絶対にあり得ないです」

涙に濡れる朝比奈さんを見てると何か手がかりの一つでも見つけて差し上げたいくなるのは男であれば当然、俺は無い頭を必死に絞って考えを巡らせた。

「すみません、朝比奈さん。その、未来からこちらに派遣される前

に何か研修とか、受けられませんでしたか？

その時、未来と連絡が取れなくなる事態がどんな事を意味するのか、どんな原因で起きるのか、勉強されていれば教えてもらえませんか？」

「うえん、キヨン君。私、禁則事項で禁則事項を習ったんですけどよく分からなくて。

でも間違った未来への分岐を選択して時の迷い子になるっていう噂は禁則事項の禁則事項に居たときにお友達から聞いたことが有るんです。

そうなったら最後、もう、ぐすん、二度と帰ることは出来ないってえ〜

うええ〜ん、私、もう帰れないんですう〜」

恐らく未来から過去の観察とか、例のゴージャス仕様版の朝比奈さんが俺に対して接触してアドバイスめいた事をしてくれたように未来から過去へ旅してなんらかの事を行う組織の様な物があるのかも知らない、そして朝比奈さんが聞かされた内容というのはそこで囁かれている、いわば都市伝説の様な物ではないのか？

以前朝比奈さんが川の流れる公園で語ってくれた内容を思い出ししてみる。一体これはどう解釈すれば良いんだ？

パラパラ漫画の例えからすれば未来からやってきた存在はいわば漫画の一コマに付いたゴミの様な物。パラパラまんがが途中から別の作品にすり替わるなんて事が有りえるのだろうか？

間違った未来への分岐という考えは、俺の足りない頭でどう考えてもあの説明とは矛盾する出来事にしか思えない。古泉が、という

か、機関とやらが時間と未来についてどの様に理解しているのかはなはだ不明な所ではあるが、どうやらこれについての明確な指針となる考えを持つては居ないらしい。

その時いかにも退屈そうに長門が足をブラブラと動かす姿が俺の視界の片隅に入った。

「長門、お前は朝比奈さんの言っている内容、どう理解したら良いと思う？」

「存在しないものには連絡が取れない」

俺の問いに長門は低いくぐもった声でそう答えた。なあんだ、そうか、そりゃ連絡取れない訳だ……って、存在しないって？

俺たちの未来が存在しないって事が？

この世界が滅びてしまふとか、そんな事を言っているのか？

「違う、未来が存在しないとは文字通りの意味。

正確に言うと八月三十一日の深夜、二十四時以降の時間が存在しない」

朝比奈さんは長門の語った言葉の意味が理解出来ないかのようにキョトンと座り込んでおられる。あの万年にやけ面の古泉ですら呆然とした表情だ。

「長門、済まない。お前の言っている事の意味が理解出来ないんだ。頼むから俺にも理解出来るように説明してくれないか」

「八月十七日の午前零時から八月三十一日の深夜までの十四日間をこれまで八千百九十二回繰り返してきた。今回が八千百九十三回目に該当する」

何だって、八千百九十二回？

確かに長門は今そう言った。よく分からないがそれは無茶苦茶な回数に違いない、いったい何年に相当するんだ？

「三百十四年」

俺の呟きが聞こえたのか、長門は事も無げにそう言った。

「えっ、三百十四年って。そんなの、嘘ですよ」

「ええ、僕にもわかには信じがたいですが、しかし、長門さんがそう言われるとなると信じない訳にはいきませんね。その原因はやはり……」

「そう、涼宮ハルヒ」

長門は尋ねた古泉では無く、何故か俺の瞳を真っ直ぐに見つめながらそう答えた。

喉の奥がくつついた様な気がして唾液を飲み込もうとした時、俺

の口の中がカラカラに乾いているのに気がついた。

「それが本当だとしてもだ、だが何故ハルヒはそんな事をするんだ。

三十一日に一体何が起こるというんだ。何か特別な事でも起きるのか？」

それを回避する方法は無いのか？」

「涼宮ハルヒは三十日まで昨日、一昨日の如く予定したイベントを毎日消化していく。

常にノルマを達成し、三十一日を予備日として休日に振り当てる。三十一日に特別な事象は一切発生しない」

「じゃ、これまでの八千回以上、全く同じ事をしてきたのか？」

そして毎回こうやって俺たちはその事実を長門から聞いてきたのか？」

「毎回同じ事をしてきた訳ではない。八千百九十三回中盆踊りに行かなかったシークエンスが一回ある。盆踊りに行ったが金魚すくに行かなかったシークエンスは六十一回。市民プールへは全てのシークエンスで行っている。また……」 「判った、お前はこれまでの全てを覚えている、そして俺たちはその全てを忘れている。

ハルヒも忘れてるんだよな？」

「そう。」

だが、これまでのシークエンスのバリエーションを生んだ原因の殆ど全ては涼宮ハルヒの言動による」

「つまりはフリーハンドをもっているのはハルヒと……長門だけなわけか」

「概ねそう理解して問題は無い。

これまでのシークエンスの内、朝比奈みくるが未来との途絶を認識したのは千二十三回目。

だが貴方が私に理由を尋ねたのは今回が初めて」

「という事は時間をループしている事を我々が認識したのは今回が初めてという事ですな」

「長門、どうして教えてくれなかったんだ」

「私の役割は観察」

そうか、だから尋ねるまで教えてはくれなかったというのか。だが余りにも長い時間、長門はたった一人で全ての記憶を持ち、俺たちと延々と付き合ってくれていたというのか。

「なあ、長門、その時間の繰り返しを終わる方法、判っているなら教えてくれないか？」

「繰り返し原因が不明である以上、繰り返しを終わる方法は不明」

その夜、それ以上の名案が浮かぶわけもなく、未来と連絡がつかない理由が判ってからもずっと泣き続けていた朝比奈さんをなんとかするため、繰り返ししている事実が判明したのですからそれに対する対処法もきつと見つかりますよと全く根拠も自信も無い慰めを何度も語り、漸く朝比奈さんが泣き疲れて泣き止まれたところで解散となった。

承

翌日からハルヒの引率でセミ取り、バイト、花火大会はじめ散々に遊び倒し遂に八月三十日がやってきた。

俺も、古泉も、そしてもちろん朝比奈さんもハルヒが不満を持つ事が無いように力一杯一生懸命に遊び倒した。

お陰で俺の夏休みの宿題は全くの手つかずのまま、小学校以来、最悪の状態ではあったが九月一日が来てさえくれればそんな物はなんとでもなるさ。

未来の存続に関わる事と俺の宿題とを天秤に掛ければどちらが大切なんぞ解りきった事だ。

もしもこれだけ一生懸命に付き合って、それでも再び夏休みが繰り返されるならそれこそ宿題に手を付けたって無駄の一言に尽きる。誰だってそう思うだろ？

長門の予言通り、三十日の夕刻、俺たちは何時もの喫茶店に集合した。

「うーん、こんなんでも良かったのかしら？」

ハルヒは俺達の期待を他所に意外な事を口走った。

この二週間、俺たちはそれこそ死にものぐるいでお前の狂騒的なイベントクリアに力一杯付き合ってきたんだ。なのに……

「まあいいわ」

なのに、まあいいって……

何だよ、ハルヒ。

あれだけ遊び尽くして、まだ何かやりたいのか？

まだ何か心残りが有るのか？

「それじゃ、明日は予備日に明けておいたけど、そのままお休みで良いわ。

みんな明後日、部室に集合ね。

じゃ、解散」

そう宣言し、ハルヒは何時もの如く飲んだフレッシュオレンジジュースの支払いの事など一切無視して喫茶店のからスタスタと出て行ってしまった。

俺たちの座った喫茶店の一角にぐったりと疲れと諦めの入り交じった空気が流れる。

「なあ、長門、今日のハルヒって、やっぱりこれまでの繰り返しと同じなのか？」

「そう」

朝比奈さんの瞳からは既に大粒の涙が今にも流れ落ちようとしている。古泉も憔悴しきった様子だ。もちろんかく言う俺だって端から見ればそう見えただろう。長門は……無表情のままじっと覗き込むように黒い大きな瞳で俺を見つめていた。

「すまん、長門。

だが、ハルヒが何故、延々と夏休みを繰り返しているのか解ったと思う。

ハルヒはあれだけ遊んでもまだこの夏休みに満足していない。
やり残した事が有ると感じているんだと思う」

「そう」

長門は再び同じ言葉を低く擦れるような声で繰り返した。

転

翌日、昼前になり漸く起き出してきた俺はそれでも思い形だけでも勉強机の前に座ってみることにした。

だが、目の前のリストに有る物はもうどこから手を付けたら良いのか解らないほどの絶望的な量の課題。小学生じみた夏休みの遊びを三百年も続けさせられてきたからか、俺の脳みその襞からは自分が高校生であった事実が完膚無きまでに消去され尽くされていたとみえて数学のプリントの最初の一問目から俺の灰色の脳細胞は強烈に理解不能を訴えている。立ち上がる気力も体力も失せた自分の身体を無理矢理椅子から引きはがすと鞆の中から三百年以上前から決して開いた事のなかった筈の教科書と一学期のノートを引っ張り出し微かな記憶の痕跡を求めて悪あがきを続ける事一時間、勿論その間に一階に下りて麦茶を飲み、いつの間にか宿題をすっかり終えてお気楽モードの妹が寝っ転がって足をバタバタさせながら見ていたテレビのバラエティー番組の再放送について見入ってしまったていた時間を含んでの話なのだが、ともかく一時間の後に俺は全面的に白旗を掲げるをやむなしとの判断に至った。

次に、読んでくるようにと買わされていた薄い英語の小説本を開いてみる。一行を読むのに四回も五回も辞書を引くというのは相当に辛く苦しい。あげくには同じ単語をもう一度引き直している自分に気がついた時、これまた着手不能と放棄することを決意する。

要するにこういったわけで俺が夕食だという妹に呼ばれてダイニングへ下りていった後には後回しにした課題の山が俺の机の右端に積み上げられていた。

恐らく二百年前から二週間毎に食べ続けていたであろうメニューの夕食を何の感慨も持てずに食べ終えダイニングを出た俺は二階への階段の手前でふと立ち止まった。

きつとこれまでの8192回、俺は同じように夕食を喰いこの階段を上って眠い目をこすりながら諦めと絶望感と疲労のまま机に向かい、ベッドに倒れ込んでその時を迎えていたのだろう。

だが、もうそれしかやれることは無いのだろうか？

俺は出かけてくると言い残し、ふらりと玄関を出ると自転車に跨り夕暮れを迎えようとしている住宅街へ自転車を漕ぎ出した。

どこかに行こうという積もりが有った訳じゃない。多分この三百年間ハルヒ達とつきあい走り回ったであろう場所を当ても無くフラフラと自転車で回っていた俺の目の前に長門のマンションが手招きするかのように夕日を受けてそびえ立っていた。

「一人で来たのは三百十四年ぶりだな」

自転車から降り立った俺は一人そう呟くとエントランスで長門の部屋の番号をボタンしていた。

プチッとノイズが聞こえる。回線が繋がったのだろう。

「長門、俺だ」

スピーカーからプチツと再び回線のノイズが聞こえ、すっと入り口の扉が開いた。これは俺に部屋まで来いという事なのだろう。エレベーターに乗り込み長門の部屋の階へのボタンを押す。小さい衝撃と共にエレベーターは静かに上昇しチンという小さな音と共に停止した。

コンクリートの壁にやけに響く俺の靴音を自覚しながら歩いて行き、一番奥の長門の部屋の前に立つとすっと扉が開いた。

「入って」

聞き慣れた声にほっとして中に入り、制服姿でじっと立つ長門に右手を揚げて挨拶すると俺は後ろ手に玄関の扉を閉めた。

「来て」

そう言うなりきびすを返し正面の廊下を歩いて行く長門の後を追いつ、大急ぎで靴を脱ぐと板間の廊下を進む。突き当たりの壁の左に進み以前と変わらず家具は座卓だけというただっぴろい居間に通される。

「座って」

促されるまま俺は朝比奈さんと三年の月日を過ごしたというあの和室を背に敷かれていた座布団に座った。右手の窓から入り込んだ夕日のオレンジ色の光が俺の正面の縦長のはめ殺しになった窓の両

脇の壁を照らしている。

長門は俺が座布団に腰を下ろしたのを見届けると俺の左側、来た方の廊下を通りダイニングへと入っていった。また、お茶責め？

「長門、さっき飯喰ってきたところだし、お茶とかも気にしなくて良いぞ」

俺は立ち上がるとダイニングの方へに二、三步歩き、そう声をかけた。

「今日はアイスコーヒー」

ダイニングから長門が答える。ガリガリとコーヒーを轆くミルの音がし始めた。長門の事だから機能優先でインスタントコーヒーがボトルコーヒーだろうと思っていたから一瞬意外な気がする。

立ちあがったついでに俺が三年間朝比奈さんと時間凍結されていた和室の扉を開いてみる。

中はがらんとした畳の間、やはりというか何の飾りもない殺風景な部屋のままだ。覗き込んだ首を引つ込め、炬燵の座卓に座ろうとして俺はベランダ近くの天井をふと見上げた。高い天井の下、和室の壁の上部にかけて空間が空いているのに気がつく。あんなスペースがあつたんだ。どうなっているんだろう？

不思議に思つた俺は玄関への廊下を戻ると右手に玄関を見ながら灯りの消えた廊下を進み、玄関脇の部屋のさらに先、突き当たりから左に廊下が折れている事に気がついた。そしてその先は階段。どこに繋がっているのだろうか？

俺は興味半分に階段を上って行つた。その時、ミルの音が止まる。「ダメ」

叫ぶような長門の声が俺の耳に届いた時、俺は既に中二階となっているロフトへの扉を開いていた。

結

俺は最初そこに目にした物が一体何なのか理解出来なかった。が
らんとした薄暗い低い天井の部屋の中央に無造作にシーツが掛けら
れた物体がロフトの板張りの床に横たわっていた。

装飾品はおろかミニマムの日用品すら殆どない長門のマンション
に一体何があるというのか？

振り返った俺の目に不安を瞳に浮かべた長門の姿が居間から差し
込む蛍光灯の光に浮かび上がっていた。

「長門、これは？」

「それは……………私」

永遠とも思える長い逡巡の後、長門の口から溢れたその言葉は思
いも寄らないものだった。

長門の言葉の意味を図りかねた俺は跪いてシーツをそつとめくり
上げた。

そこにはシャギーのかかった短い髪の高夏の制服を纏った小
柄な少女が目を閉じ横たわっていた。見間違えようもない、長門だ。
横たわる長門の頬に触れる。その柔らかな頬に微かに温もりを感
じる。本物だ。

俺の真横に立つ素足のつま先からそつとパンして上を見上げると、
そこにも漆黒の双眸で俺を見下ろす長門が……

「長門、いったい何が起きているんだ？」

「それは前のシークエンスまで私であつたもの」

俺は横たわつた長門にとりすがる。

「長門、起きろ、どうしたんだ、俺だ」

「すでに時間の巻き戻しによる終焉を待つ存在、いわば抜け殻」

解らん、長門が何を言っているのかさっぱり解らん。
横たわつたまま身じろぎすらしない長門を揺り動かす。

「頼む、長門、起きてくれ。いったいどうしちゃったんだ？」

だが何度呼んでも揺り動かしても長門は眠ったまま。

「私は此処にいる、それは廃棄されるボディー」

だって、長門は長門じゃないか。俺は意識を無くしちゃった長門なんて、二度と目覚めない長門なんて嫌だ。頼む、長門、起きてくれ。目を開けてくれ……

「私には理解不能、だが、貴方が望み、命じるなら」

頭上で小さく囁くような声が聞こえた瞬間、ゆっくりと瞬いて横たわっていた長門が半身を起こし不思議そうに俺を見つめた。

「良かった、長門、目覚めてくれたのか」

「私は役目を終えた存在。

次の私を形成するために使用したりソースは膨大、すでに形態維持にも支障が生じている」

たった今目覚めたばかりの長門は床に座ったまま自らの足元を指さした。

その瞬間、投げ出されていた長門の足先が細かい光の砂となり形を失う。

嘘…… だろ？

「コーヒー、飲む？」

すべての脈絡を否定するかのように俺を見下ろすもう一人の長門はそう言う俺の返事も待たずにきびすを返し階段を下り始めた。

「長門、お前も飲むか？」

俺の問いに何時になく微かに寂しそうに微笑んだ長門は立ち上がろうとして片足の先が無いためにバランスを失いおれにすがりついた。

「まかせろ」

俺は長門に向き合うとその両腕を俺の首の後ろに回させると長門の膝の辺りに手を差し入れぐつと抱き上げる。信じられないほど軽い長門を抱え上げ狭い階段を一步步つゆつくりと下りていった。

コーヒーの良い匂いのしてくるダイニングの前を通り過ぎ、居間に戻ると俺が先ほどまで座っていた座布団に長門を座らせ、俺は長門の左側、ベランダを正面に見る位置に座る。

後ろでカチツとドアの閉まる音がして氷の入った三つのグラスとコーヒーメーカーのポット、ガムシロップ、コーヒークリームのポーションなどをトレイに乗せてダイニングからもう一人の長門が現れ、俺の左手、俺が抱いてロフトから連れてきた足先を失った長門の正面に座る。たつぷりと氷の入ったグラスの一つを俺の前に置くと上から香氣溢れる淹れたてのコーヒーを注いでくれた。

「有り難う、コーヒー専門店みたいだな」

「貴方が好きだから……
アイスコーヒーを」

「十一万四千七百二日は貴方の好きな物を学習するのには十分な時間」

もう一人の長門がその後を続けた。

「そ、そうだろうな……」

俺が想像も付かない長い時間を、その繰返しのシークエンスの間、ハルヒに拘束されていない自由時間とも呼べる時間を使って、あるいはそんな事を学び、訪れた俺にコーヒーを淹れる、ほんの僅かな可能性の事を思っただけで長門は時を過ごしていたのかもしれない。

そんな事を思いながらガムシロップとコーヒークリームを加えストローで丹念にかき混ぜ、長門が淹れてくれたアイスコーヒーを味わいながら飲んでみる。やっぱり家で飲むボトルコーヒーより旨い。喫茶店のと比べてどうかと言われるれば分からないが何となく長門が淹れてくれた方が香りの余韻が豊かな気がする。

「どう？」

二人の長門が同時に尋ねる。

「ああ、旨い、このアイスコーヒー、俺は好きだ」

俺の右に座る長門、長門（右）、つまりは俺がいわゆるお姫様だっこで連れてきた方の長門がほっと安堵のため息を漏らす。

「なあ、長門。済まないが、何故長門が二人いるのか、俺に分かるように教えてくれないか。」

そして何故一人がロフトで寝かされていたのかも「

二人の長門は同時にそれぞれの前に注がれたアイスコーヒーを一口飲むと交互に一つの話語り始めた。

ハルヒによる終わり無き夏休みにおいて最初の繰返しが発生した時、この銀河を統括する情報統合思念体は少なからず驚愕と呼べる認識において事象を峻別したらしい。一個の有機生命体が時空物理工学、時空情報工学の手段をまったく用いず銀河辺境星系の一惑星の気圏内のごく限られた地域に於ではあるがその全体に対し完全な時間遡行を行いかつ周辺との時空接合に何ら破綻を生じていないとか何とか、要するにハルヒの常軌を逸したメチャクチャにまあ驚いたんだろう。

情報統合思念体は直ちに初回のシークエンスの終わりの長門から

送られた記録・情報を二回目のシークエンスの8月17日早朝の長門に伝達し長門は時空が繰り返された事を認識したわけだ。

しかしこの方法では初回の長門が31日深夜に保持していた情報の限定された一部しか保管されなかった事になる。情報の遺失を恐れた情報統合思念体は次回のループに備えて対策を講じた。

その対策とは8月31日の24時直前の長門の全情報を時空間に穿った情報線を介して次のシークエンスの8月17日午前零時の直後、時空が安定した直後の長門へと直接送付するという荒技だったというのだ。則ちハルヒによって全く同じ状態で8月17日を迎えた長門は前のシークエンスの8月31日の長門へと自身を書き換えてきた、というか、毎回自分自身を造り替えてきたというのだ。

通常の状態であれば長門は数千年の時を経ても劣化など生じることは無い。だが、情報線を介しての情報の伝達においてはごく僅かの頻度ではあるが情報の劣化、エラーが確率的事象として累積していくらしい。そして二の十三乗の繰返しの結果その誤差が許容範囲を超したため複製に基づくエラーへの耐性を大幅に高めた新たな長門を作り直し、そして長門の314年にわたる記憶をアーカイブとして取り込んだ長門（左）が今回のシークエンスの冒頭で形成されたという事だ。その形成のためリソースを使い果たした長門（右）は最早これ以上、次のシークエンスにその存在を伝達することなくそのまま今日の真夜中に時の終焉が来た瞬間に消滅するのを機能停止状態で待っていたというのだ。そんな理不尽なと言った俺に、長門（右）はこう囁いた。

「私はまもなく未来のない時空の終端で遺棄される。

それは……貴方も……同じ」

俺が意識の中から追い払っていた事実が長門の言葉により現実味を帯びて俺の意識の表層にドンとのしかかる。

「そ、そうだ……よな。
だけど……

いや、だからだ。

俺、その瞬間までお前の側にいて良いか？
ずっとお前の手を握っていて良いか？」

長門（右）がきよんとした風に俺を見つめる。

「私は、私ではない。

貴方の左に居るのが私。

私は遺棄すべき抜け殻。

……

でも、嬉しいと私が感じるのは、何故？」

俺は思わずそう言った長門を抱きしめていた。

「そんなの、当たり前だろ、お前は自分で言うようなゴミなんかじゃない。

正真正銘の長門だ。

そして俺がお前を失いたくないと思う……

それじゃ、駄目か？」

その時、もう一人の長門、長門（左）が思いも寄らない事を提案した。

「私は貴方のその記憶を失いたくはない。
遺棄された私は統合思念体の監視リストからは既に抹消されている。」

したがってそのリソースがどの様に消費されても情報統合思念体は一切関知しない」

「古泉一樹と朝比奈みくるを呼ぶ。
許可を」

俺の腕の中の長門がそう引き継いだ。俺としてはこのまま長門と二人つきりというか、三人というか、この状態のままでその時を迎える覚悟をしていたのだが、長門の言葉には俺に否を言わせぬ力が秘められていた。

「ああ、あいつらにもお前、いや、お前達の苦勞を知らせてやるのは賛成だ。呼んで良いぞ」

長門（左）が携帯でメールを送信し、朝比奈さんと古泉が揃って到着するまでのおよそ十五分、俺は膝の上の長門をずっと抱きしめ、とりとめもなく俺の子供の頃からの夏の思い出を語っていた。

長門（左）が追加のコーヒーを淹れるため轢いていたミルの音が止んだ時、エントランスに着いたと古泉からインターフォンで連絡が入った。

「私は既に個体としての機能を失っている。
それでも、私には貴方に感謝を伝えたいという自由意志が残存している。」

感謝する……降ろして」

俺が長門を座布団の上に座り直した時、玄関のチャイムが鳴り古泉と朝比奈さんが部屋に上がってきた。

「こ、これは……」

「長門さん、どうして二人？」

古泉と朝比奈さんは俺の隣にいる長門とダイニングからコーヒーの用意をして現れた長門を交互に見比べている。動揺する二人に先ほど聞いた内容を俺がかいつまんで説明を終えると二人の長門が再び交互に語り始めた。

「私は完全な記憶と身体情報の全てを次のシークエンスに送る事で存在を受け継いできた」

「貴方たちが私と同じように記憶を引き継ぐ事が可能であれば」

「涼宮ハルヒによる時間の繰り替えしを認識し」

「適切にループを離脱する方法を獲得する可能性が生じる」

「だが、記憶の全てを引き継ぐ事は限りない牢獄ともなり得る」

「したがって私は貴方達の記憶の一部を次のシークエンスに伝達する手段を提供する」

「そう、もう一人の私は情報統合思念体からは遺棄された存在」

「残ったリソースを用い貴方たちの化学的情報としての記憶の一部を次のシークエンスに送付するガジェット、マイクロマシンを作成する」

俺が長門達の言葉の意味を図りかねていると古泉が大きく頷いた。

「なるほど、お二人の長門さんがいらっしやり、なおかつ我々が繰り返されている時間の流れを認識しているこのシークエンスだけで可能な試みなのですね。

解りました、是非、お願いします」

「よく分からないが、これがたった一つの望みなのか？」

「そう」

そうだな、これがただ一つの可能性の鍵ならばそれを行使する
しかないだろう。

「朝比奈さん、俺も長門に頼もうと思います。
良いですか？」

「あ、はい。私、こういった事、よく分らないですけどキヨン
君が良いと思うなら私も賛成します」

「俺たち三人の意志は決まった。長門、次の繰り返しの、いや、こ
れから先の幾多の繰り返しの世界の俺たちにチャンスをくれ、頼む」

俺は二人の長門に頭を下げた。

「抱いて。

もう一度」

長門（右）が俺の手をとり囁く。俺は長門（右）の真横に足を伸
ばして座り直すと自分の膝の上に横抱きに長門を乗せた。

「これで、良いか？」

「良い……」

古泉一樹、朝比奈みくる、
彼の両隣に座って……」

古泉が俺の右に、朝比奈さんが左にちょこんと座る。

「マイクロマシンを形成し経皮的に頭蓋内へ挿入する。

挿入されたマイクロマシンは記憶と思考を化学的に収集し其れを自らの構成情報と共に次のシークエンスの該当者の脳内に微小な情報断層を穿ちそこに複製を作成する。

複製されたマイクロマシンの存在寿命は15日間。

即ち繰り返ししのシークエンスを抜けた日に自動的に消滅する。

送られる記憶と思考は完全ではない。

限定的かつ断片的と成ることが予想される。

その事は理解して欲しい」

「解りました、それで十分です。

貴女のように精緻な記憶を送られたとしても僕たちならばとても処理しきれないでしょうから。

では、私からお願いします」

古泉はそう言うつと床に手をつき頭を長門の方へ差し出した。

「八月十七日午前零時から三十一日二十四時ジャストの時間を繰り返し返している。

八月十七日午前零時から三十一日二十四時ジャストの時間を繰り返し返している。

八月十七日午前零時から三十一日二十四時ジャストの時間を繰り返している。

……………」

古泉はひたすら呪文の様に繰り返している。

「了解した。」

始める……………」

長門はそう言うのと左手の人差し指を古泉の額に当て、小さく早口で呪文を唱え始めた。

見る間に長門の足先から大腿にかけてが輝く虹色の光の砂粒となり消えていく。リソースを使うとは、この事なのか……

恐ろしさのあまり俺は目を瞑り長門を力一杯抱き寄せる。

「転送が完了した」

平坦な長門の声に目を開けると古泉の呆然とした顔が目に入る。

「長門さん、それは？」

俺は古泉のしている視線を辿り……目を疑った。古泉の額に伸ばしていた長門の左手もまた消滅している。

「問題ない、リソースの残量は十分」

止めると叫ぼうとした俺の目を見据え、長門が強くそう言った。

「朝比奈みくる、始める」

おどおどとしている朝比奈さんの額に右の手先をそつと触れると再び長門は呪文を唱え始めた。

「朝比奈さん、未来と連絡がつかなくなっていることに気づいて下さい」

古泉が絞り出すようにそう言う。

「え、でも、それ、禁則事項が……」

朝比奈さんが取り乱している間に長門の腰が砂粒の様に消え去り、長門は両の手を失った。

「終了した、次は、貴方。」

しっかり……

抱きしめて」

そう俺に囁くと長門はその唇で俺の唇を塞いだ。

思わず目を瞑る俺に強く吸い付くように口づけた長門の舌の先端が俺の口にまさぐる様に侵入し俺の上の歯茎の裏に舌の先端がぴたりと当たる。

長門、自分の身を滅ぼしてまで俺たちに尽くしてくれる、そんな長門に俺は本当の誠意を持って接してきたのか。通り一遍だったとは決して思わない、一度ならず俺を救い、助けてくれた頼りになる宇宙人の少女……

いや、そんなじゃない、この儚くも苦しい俺の気持ちは何なんだ？

長門、俺は、お前が本当はずっ好きだった、おまえがずっと気になっていた。

繰り返す世界で、もっとお前の側にいたい。

抱きしめていた長門の身体感覚と俺の口を塞いでいた存在がふっと消えた瞬間、俺たちの時は………静止した。

{ the end of this sequence }

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2280j/>

エンドレス 異聞 （エンドレスエイト 8193回目）

2010年10月11日17時44分発行